

受付番号

留学・研究計画書

氏名 高田 洋平	留学機関名 トリブバン大学ネパール・アジア研究所
留学先国名 ネパール	留学期間 西暦 2010年10月～2011年9月
研究テーマ ネパール、カトマンズのストリートで生きる子どもの日常実践と社会化についての研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の目的は、ネパール・カトマンズにおけるストリートチルドレンの生活実践を明らかにすることである。とくに、ストリートという場所での子どもの社会化に焦点を当てた調査を通して、彼らのストリートでの豊かなネットワークや生を支える仕組みを明らかにする。</p> <p>ネパールでは都市のストリートという社会空間は、都市人口が急激に増加した1990年代以降、環境が急速に悪化して危険な場所とされるようになった。さらにメディアや開発NGOによってストリートチルドレンの困難が取り上げられると、ストリートは子どもの成長に適さない場所とされるようになった。しかしながら、ストリートで生きる子どもたちにとってストリートは、メディアや開発NGOの言説が構築してきたような「危険で子どもの成長に適さない場所」ではない。子どもたちの多くは、ストリートで仕事をしておとな社会との関係を築き、やがて成長していく。子どもたちの世界から観れば、ストリートは常識的なイメージとは全く異なる姿を見せる。</p> <p>申請者は、このようなストリートで生きる子どもの生を可能にしている環境とそこでの生活実践に基づいて、都市社会と開発NGOの支援について再考する必要があると考えている。なぜなら、子どもに関わる開発NGOが、カトマンズだけで非公式なものを含めれば200団体以上あると言われるなかで、未だにストリートで生きる子どもの生活上の困難が軽減されているとは言い難い今日の現状は、「子どもたちにとってのストリートという環境」に対する十分な理解がなされていないためであると考えられるからだ。本研究は、家族や学校という場での社会化が子どもにとって最も適切であり、ストリートは危険で子どもの成長に適さない場所とする開発NGOや中産階級のストリート像をいったん括弧に入れ、子どもたちがストリートという環境を構成するネットワークのなかで、実際に成長している様を明らかにする。それによって、ストリート生活を単純に否定して、子どもを施設に収容・管理する施設中心型の支援へのオルタナティブを提示できる可能性がある。</p> <p>従来のストリートチルドレンについての人類学的研究では、子どものストリート生活のなかで慣習化された行動様式の文化的な特異さに着目してきた。しかし結果として、特異さに着目することで、ストリートチルドレンとその他の中産階級家庭の子どもとの行動様式や文化的な「差異」のみを強調することで終わることが多かった。またストリートチルドレンという表象に隠された権力性を指摘する研究も行われてきたが、表象のレベルでの分析に終始し、ストリートでの生活を可能にしている実践に迫ることができていないものが多い。</p> <p>行政の施策に期待できないネパールの都市のストリートでは、何がそこで生きる人や子どもの生を可能にし、あるいは困難にしているのか。都市を生きる子どもの日常実践と社会化の過程を明らかにすることは、彼らにとっての生活の基盤としてのストリートとネパールの都市社会について明らかにすることでもある。ここにネパール地域研究における学術的意義がある。それと同時に本研究は、明らかになった日常実践にもとづいて、開発NGOによる子どもの支援の再検討を行うことも視野に入れており、その点において社会的意義をもつものであると言える。</p>	

成果報告書

記入日 2012年 4月 10日

氏名 高田 洋平	留学先国名 ネパール	所属機関 トリブバン大学ネパール・アジア研究所
研究テーマ：ネパール、カトマンズのストリートで生きる子どもたちの日常実践		
留学期間：2010年 10月～2011年 9月		
<p>留学の目的</p> <p>留学当初の目的は、「ネパール、カトマンズのストリートで生きる子どもたちの日常実践」というテーマに基づき、現地の研究機関に所属しつつ、彼らがどのように生活しているのかについて人類学的方法論を用いた調査を行うことであった。</p> <p>研究の概要</p> <p>「ストリートチルドレン」は、1つの本質的な社会的カテゴリーとして理解され、「貧困の被害者」や「困難な環境を生き抜く英雄」といった神話的な言説、ステレオタイプとともに語られてきた。ストリートチルドレン内の様々な差異（年齢、階級、ジェンダー等）を等閑視することによって成り立つそのようなストリートチルドレン像は、しばしば子どもへの適切な支援プログラム計画の障害となり、実際のストリートで生きる子どもの生活を害することさえあった。こうした問題は1997年、ノルウェーのトロンハイム大学で開かれたストリートチルドレンをめぐる国際ワークショップを始めとして、いくつかの場所で指摘されてきた。しかし未だにネパール国内ではストリートチルドレンに関わる神話的な言説は根強く、この問題が解決されたとは言い難い。その背景には、ストリートチルドレン個人ではなく、彼らを取り巻く都市のローカルコンテクストに関する情報の欠落という状況がある。特に彼らが密接に関わっているインフォーマルセクターでのストリートチルドレンの生活に関する情報の欠落は、ストリートチルドレンという社会的カテゴリーに神話的な領域を与えていた。留学期間中の研究の目標の1つは、神話的な領域をもつストリートチルドレン像を、詳細な民族誌的データを集めることで解体することであった。その目標は、今回の調査でストリートチルドレンが他の集団との関わりのなかで生み出す多様な「関係の束」を明らかにしていくことによって部分的に達成された。特に、ストリートで生きる子どもをNGOのサービスや慈善行為の客体と見なすのではなく、与えられた環境に依拠しつつ、それらを活用し、変革していく可能性をもったエージェンシーをもった存在として捉えることで、いくつかの姿が明らかになった。本報告書では、ストリートチルドレンの日常実践について、1. 子どもの受け皿としての都市のストリート、2. ストリートの意味の読み替え実践、3. ストリートでのインフォーマルな教育の3点を、明らかになった成果の一部として以下に報告する。</p>		

1. 子どもの受け皿としての都市のストリート

今日、現代ネパールの首都カトマンズの様相は劇的に変化しつつある。カトマンズへの人口の一極集中が起こり、1952年から2001年までに都市人口は、1952年の3倍の、およそ164万人となった。1970年代以降の、開発資本、観光産業、カーペット産業の3つのチャネルによって、資本がカトマンズに流入し、現在ではモダンなショッピングモールや、美容院、そしてシネコンなどが次々に現れている。そのような状況の変化は、新たな生活スタイルを求める新中間階級と呼ばれる人びとを生みだし、彼らによって消費される大量のモノは、同時に大量の廃棄物としてストリートにも溢れるようになっていった。このような変化がストリートで生きる子どもたちの生活の資源を提供している。「ネパールでは、スラムの貧困層の

表1. ストリートが提供する仕事の機会

	物乞い	乗り合いバス	有価廃棄物拾い
内容	相手の足に頭をつける仕草などを繰り返し、お金や食べ物をもらう。	添乗員が載っていないベンチを待ち、行き先を告げて客を集める。	ストリートに廃棄されたゴミ(Kawadi)のなかから転売可能な資源を集めて売る。
時間帯	常時。	通勤時間帯(朝7時~10時、夕方4時~7時)	夜7時~早朝5時(公的な清掃サービスの作業前)
収入	一人当たり、1~5ルピー	ベンチを満員にして10ルピー、半分なら5ルピー、少ないともえない。	スキルによる。よいスポットを知っている、など。一日の収入例を示せば、260ルピー。
必要な資源やスキル	小さい身体、顔つきであることが大事とされる。大きくないと物乞いをしてもほぼ拒否される。	ベンチの行き先に関する知識。	ボラ(麻袋)と、Kawadiについて、資源ごみが集まる場所についての知識、売るときネットワーク。
仕事の特徴	モノとお金は集まりやすいが、その時々の変動によることもあり、収入は日による。	成長に伴い、顔つきが大人数になった子どもがやっていた。	Kawadiを売る場所で、おとな社会と密接に関わる。これを通して子どもはまた生活や意味世界を変えていく。

子どもよりもストリートチルドレンの方が豊かな経済状況と栄養状態にあった」(Baker, Lachael:1998)という調査結果があるように、都市のストリートで生活することは、子どもたちの積極的な動機になるという場合も少なくない。実際、多くの子どもが、ストリートで収入を得ることを目的にストリートに出てきている。そのようなストリートという環境が提供する仕事は、観光客への物乞い、行き来する人の利用する乗り合いバス、そして有価廃棄物を拾う仕事などがある(表1)。それぞれが都市のストリート

という環境が提供する仕事の機会を子どもたちが自らのエージェンシーによって活用し、それらを組み合わせることによって恒常的な現金収入の手段としている。またこの3つの仕事に限らず、ストリートは無数の現金収入の方法をストリートで生きる子どもたちに提供している。駐車中のバイクの見張り、工事現場の警備員など、人びとの小さなニーズを見つけ出しながら、それを仕事としていく。このように、急激に変化するストリートという環境が、子どもたちの受け皿となり、かつストリートチルドレンという社会現象を構成する上で1つの重要なアクターとなっている。

2. ストリートの意味の読み替え実践

ストリートという困難な環境を生きる上で重要なファクターとして、次に指摘しておかなければならないのは、子ども自身による、ストリートで遭遇する事やモノの意味を読み替えているという実践である。

ストリートではNGOや慈善団体などのアクターが頻繁にストリートチルドレンに対して働きかけを行っている。これまでのストリートチルドレンの理解においては、ストリートチルドレンはそうした働きかけの受け手として立ち現われていた。しかし今回の留学期間中の調査によって、ストリートチルドレンが、そうした他者からの働きかけの意味をそのまま受け取ることなく、むしろ積極的に自分の生活という文脈に取り込むことによって、結果的に意味を読み替えているという事態が多いことが明らかになった。例えば、ストリートチルドレンを対象としたキリスト教団体によるクリスマスプログラムなるものが開かれた。カトマンズのストリートで生きる子どもたちの多くに声をかけ、プログラム会場にはおよそ

100人近い子どもたちが集められた。プログラム自体はある程度、団体職員の考え通りに進められ、最後にズボンのプレゼントが配られた。その際、渡されたプレゼントの多くが、子どもたちによって転売されたのである。それについて子どもの1人はこう語る。「パンツが欲しければ自分で買う。僕は僕の欲しいモノを買うことができる。必要なのはモノじゃなくてお金だよ」。これは貧しい子どもへの恵みという慈善団体のプログラムの意味をそのまま受け入れるのではなく、自らそのプログラムを利用して、生活の糧へと解釈しているという姿である。ここではストリートチルドレンへの慈善行為が、換金的手段へとというように意味が読み替えられている。ストリートチルドレンに対する様々な働きかけを利用し、かつその意味を読み替えるという実践は、子どもの生活の随所にみられ、それによってストリートで生きる子どもの実践が成り立っている様子が明らかになった。

3. ストリートでのインフォーマルな教育

ストリートチルドレンは適切な教育を通して社会化されるべき存在だと見なされてきた。しかしながら、ストリートという都市の環境は、構造化された教育とは異なる、インフォーマルな教育というべき機会を提供している。ここではその機会を提供しているものとして、Kabal Communityを紹介したい。Kabal Communityとは、有価廃棄物を売買するジャンクヤードを中心に、インフォーマルな労働者によって形成されているコミュニティである。ここでは売買の基本的な知識やマナーをはじめ、成員同士の家族的なつながりのなかで、様々な規範やルールが存在する。有価廃棄物の売買という仕事を始めるためには、このインフォーマルな労働のルールを受け入れていく必要がある。それはストリートで生きる子どもがストリートで使用するような有機溶剤などの薬物の使用は、ビジネスの邪魔になるといった理由から、この場所で菌許されない。いくつかの禁止事項を伴うルールや、あるいは売買における計算の仕方などを、子どもはKabal Communityで働く労働者とのやり取りを通じて、つまりそのコミュニティに参加することを通じて学習していく。「一度、有機溶剤をやったら、しばらくKabalに入ることを禁止された」というように、実践的な経験によってある種の教育的な役割が果たされていると考えられる。そうした教育は子どもたちの道徳的な意識の形成にも関わっている。ストリートチルドレンには反道徳的な存在という根強いステレオタイプが結び付けられているが、留学期間中の調査により、ストリートで生きる子どもはいわゆる一般的な社会における道徳と決してかけ離れているということはなく、一般的な大衆のまなざしに極めて敏感であるということが明らかになった。ストリートを掃除する行為や、実際に大衆のまなざしによって自分を律しているということについての直接的な言明など、その道徳的な意識は一般的な社会のそれとかけ離れているということはない。これはKabal Communityをはじめとする、子どもたちが日常的に関係し合う、インフォーマルセクターとのかかわりとそこで展開されるインフォーマルな学習の結果として形成されていると考えられる。

以上、ストリートチルドレンの日常実践について研究を進めるなかで明らかになった1. 子どもの受け皿としての都市のストリート、2. ストリートの意味の読み替え実践、3. ストリートのインフォーマルな教育の3点を、報告したい。

留学の感想

留学期間中、私の身体は、まさに混沌の世界に投げ出された。南アジア、ネパールの首都、カトマンズは、雑多なものが入り乱れ、五感をフルに活用しなければ呑みこまれてしまいそうになる、そんなエネルギーを持つ場所だ。そんな場所で、ストリートチルドレンの友人たちにまじり、埃と排気ガス、季節によっては激しい雨のなかで、ただひたすらに三色ボールペンを握り、フィールドノートを書き続けた。

泣き、笑いという言葉があるが、ストリートで生きる人びとや子どもたちに受け入れられ、一緒に過ごした時間は、まさに泣き、笑いの日々であった。ストリートの子どもたちの自由闊達さに笑い、生活のなかで見せる子どもらしい創造性には舌を巻いた。ストリートの子どもたちが、いわれなき罪で投獄されたときには、警察に怒鳴り込みにいったし、逆に子どもたちと一緒にストリートで夜を明かしたときには、彼らに厳重に守ってもらった。ストリートの子どもたちがひどく殴られたときには、夜間病院に向かうタクシーのなかで子どもたちと一緒に号泣し、ストリートの子どもの1人が、初めて借りた部屋に招かれたときには、とてもうれしかった。「よく俺らのところに来て、写真だけをとって帰っていくやつらは多い。観光客、新聞記者、カメラマン。あとは、支援すると言っておいて、何もしない支援団体の人間。そういうやつらが多い中で、洋平とあとフランスからいつも来る友人だけが、信用できる」、と一緒に過ごしていた子どもの1人に言われた。そういう関係のなかで、私はいろいろとストリートのことを教えてもらっていった。そのような時間は留学中だからこそできたことである。NGOなどの実践者でさえ、今回のような長い時間を子どもと一緒に過ごす、ということはできない。本当に貴重な時間であった。

帰国後は、国内学会やシンポジウム、国際研究集会、ゲストスピーカー講義などの場で発信する作業に追われることになった。例えば2011年8月にネパール、カトマンズで開催された国際会議、International Conference on Changing Dynamics in Nepali Society and Politics では、ネパール研究を先導してきた欧米をはじめとする著名な研究者が一堂に会するなかで研究成果を報告した。ストリートチルドレンの生の実態を明らかにしようとする私の報告は、会議の場でも大きな関心をもって迎えられた。また2012年1月には、国内研究集会で知り合った教授に招かれ、立命館大学の講義の時間に、ゲストスピーカーとして「学問と実践をつなぐーネパール、カトマンズのストリートチルドレンの日常実践からー」というテーマで報告した。臨床社会学、社会福祉学といった、実践志向性をもった約200人の学生に対して、学問がどのように実践的な課題の解決に寄与するのか、また、その課題などについて発表した。その他にも、メールマガジンへの投稿、地元の小学校6年生のクラスで、ストリートで生きる子どもたちの生活を紹介など、多方面で発信を続けている。

留学を経なければ、こうした発信のどれもが不可能であった。作業が落ちついた3月、いつのまにか「発信できること」がわずかながら自分のなかに育まれつつあることに気が付き、私は驚いた。それは、ネパールのストリートで受け入れてくれた子どもたちと人びとに与えてもらったものであり、また留学という機会を下さった松下幸之助財団の方々に与えてもらったものである。もちろん、まだまだ未熟なものばかりであるが、今後、様々な方面で発信しながら深化させていくことを通して、今回、貴財団とストリートの子どもたちから受けた大恩を返していきたいと考えている。



写真 1. Kamaradi 寺院にて

一緒に多くの時間を過ごしたイッコル、アシスたち。調査を続けるなかで、ストリートの子どもたちが、自分たち自身の生活を書いたり、話したりしてくれることが多くなっていった。この写真はそのときの様子。



写真.2 子どもたちと。



写真.3 ジャンクヤードにて。

有価廃棄物の売り買い。
拾った資源を、ジャンクヤード (Kabal) で売って生活費を得る。子どもはこのようなインフォーマルセクターで働く人びとの密接なやり取りを通して生きている。